

(1) ガイダンス

総合的な学習の時間を始めるにあたり、各教科で学んだ知識、技能を組み合わせ活用し、目の前のさまざまな課題を解決する力を伸ばしていく時間であることを確認した。その上で、総合的な学習の時間の目標、本校の総合的な学習の時間の目標、先輩達の取組の様子を見ながら3年間の目標や流れ、大きなテーマである「住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～」について確認した。

(i) 住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～

事前に生徒が抱く島根県に対するイメージを集約したところ、「知名度が低い」「PRが下手」「交通網が未発達」などの否定的な意見が多くあった。加えて、直近40年で県の人口が20万人以上減り、少子高齢化が進んでいる実態も確認した。

「あなたが成人した時、島根に戻ってきたい？」という質問を行ったところ、表1のような結果となった。

表1 「あなたが成人した時、島根に戻ってきたい？」の結果

はい…45%	いいえ…55%
理由	
田舎ならではの良さがある 自然がきれい、物価が安い 安心して子育てできそう など	何もない、いろんな経験をしたい 都会から島根を見てみたい 格差があるから（医療等）など

ここで人口減少・少子高齢化といった島根県の現状は、生徒が成人して活躍する日本の何十年か後の姿と同じであるということを伝

えた。その上で「我々は日本のトップランナーである」という肯定的な考え方のもと、総合的な学習の時間「住みたいまちプロジェクト」を進めていくことを確認した。

(ii) Bridge I 「社会を知る」

1年生は、人を大切にして生きていこうとする生き方を考え、他と共に関わりながら支え合って生きていこうとしたり、地域で人々と支え合って暮らすことの意義や難しさを自分のこととして考えたりできるよう学習を進める。そして地域と関わる探究的な活動として高齢者福祉施設での交流体験があることを伝えた。社会（島根）の現状を知り、今自分にできる活動を計画し、実践することを大きなテーマとして活動を進めていくことを確認した。この Bridge I では図1のようなキーワードを示し、全ての活動において意識する内容であることを確認した。

学習のキーワードは

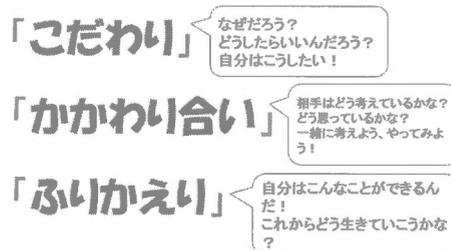


図1 Bridge I 学習のキーワード

1年次での活動は以下の3つに大きく分けられる。

①島根で生きる人に学ぶ

地元島根に根ざし、活動を続ける方々の講演を聞き、現状や課題について触れる機会を設ける。環境・伝統芸能・市政（行政）・観光などさまざまなジャンルで活動をしておられる方々の考え方や活動の仕方に触れ、自分にできることを考える機会とする。

②体験を通して学ぶ

高齢者福祉施設での交流体験活動は、地域と関わる探究的な活動の中心となる。活動を

通して、自分の住む地域を振り返り、住みたいまち・住みたいまちにするために、今の自分にできることは何かを考える。このような活動は、課題の解決に向けて実践を行う良い機会となる。事前訪問を行って高齢者福祉施設のことを学んだり、当日の交流内容の立案・準備を行ったり、活動後には交流について振り返る活動を行った。

② 自分を見つめる

高齢者福祉施設での体験交流を通して、社会と関わることで感じた「今」の自分について振り返り、まとめの新聞を作成する。体験交流での成果や今後の課題、次年度へのつながりなどを含めて、新聞を使って発表会を行う。

ガイダンスのふりかえりより

- 住みたいまちプロジェクトをすることになりました。3年間で社会について知り、交流体験・職場体験・社会貢献活動・新聞づくり・発表などの活動をするのがとても楽しみです。自分を見つめなおす機会にもなるのでがんばりたいです。
- 一人一人が自覚して、将来のためにどのように活動するかが分かってよかったです。すごくおもしろそうでした。ぼくもがんばって「島根の明日」を創れるようにがんばっていきたいです。
- 総合的な学習の時間が、自分たちと島根の未来につながっていると知り、よりがんばろうと思いました。「島根はトップランナー」という言葉が気に入ったので、自分だけでなく、島根や世界のためにがんばりたいです。
- これから3年間見通しをもっていろいろな体験・経験をするから、今までの学習と結びつけて解決する力を伸ばしていきたいと思いました。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・本校の3年間の総合的な学習の時間の目標や流れに見通しがもてるように、昨年度の活動の写真を使いながら行った。
- ・島根の現状が未来の日本とリンクすることを強調し、これから行う活動が大人になったときに自分の力になることを確認した。

(2) 講演会

島根の現状や課題、良さを知り、住みたいまちについて考えることを目的に、4回の講演会を実施した。地元の島根に根ざし、働いておられたり、活動をしておられたりする方に講演をお願いした。講師と講演内容は以下のとおりである。

・認定 NPO 法人自然再生センター 小倉 加代子氏

小倉氏はかつての中海・宍道湖をとりもどすために、島根大学と連携して赤貝の生育環境のモニタリングをしたり、小学生とともにスジアオノリの養殖をしたりするなどさまざまな取組をしておられる。当日は中海・宍道湖再生のための活動やそれにかかる小倉氏の思いを語ってくださった(図2)。



図2 講演会の様子

講演会のふりかえりより

- これから先、僕たちは島根・松江を住みたいまちにするためにはどうすれば良いのか考えていきます。その中で松江の良いところである自然豊かで情緒ある町並みを活かしていけると良いと思います。
- 小倉さんがおっしゃっていたように、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけることで前に進んでいけることを改めて感じました。きっかけを待つのではなく、自ら行動し、課題を見つける力をつけていくことが大切だと感じました。

・松江市役所産業観光部 矢野 正紀氏

矢野氏には「人口減少社会の中で未来を切り開こう！」という演題で講演をしていただいた。前半は人口減少による地域経済の縮小など松江市の抱える課題について、後半は松江農水商工連携事業や松江地域おこし協力隊など、課題を克服するために松江市が取り組んでいる活動について話して下さった(図3)。



図3 講演会の様子

講演会のふりかえりより

- (人口減少の話を受けて)新しい商品などを作って、人との交流を通して発信したり売ったり買ったりすることを地元で行ったり、何かやりがいのあることを見つけて行動していくことが大切なんだなと思いました。
- (人口減少、少子高齢化ということを知って)このようなことを知り、人口が減少する理由はたくさんあることも知りました。それと共に、このようなことを調べて改善しようと活動している人々のことに気付くことができました。やはり、誰かが動かないと始まらないと思いました。だから、このような話を聞いた私たちが動けばいいなと思いました。

・大海崎伝承ホーランエンヤ保存会 古藤 晴伸氏

ホーランエンヤについて知らない生徒もいたので、事前学習で基本的なことをおさえてから講演を聞いた。当日はホーランエンヤの様子を生徒に見せながら、伝統芸能を後世に伝えていく大変さやその価値について話して下さった(図4)。



図4 講演会の様子

講演会のふりかえりより

- 「ホーランエンヤ」は、日本三大神事の一つと知って、すごさを感じました。大切な伝統的行事なので続けていけるように自分たちも何かしていきたいです。
- 今は人が足りず、大変だということがわかりました。これは、松江や島根の人口が減っていることと関係していると思います。「ホーランエンヤ」は、すごいお祭りなのでこれからも続いて欲しいです。私はホーランエンヤを見たことがないので、次のホーランエンヤを見てみたいです。

・ NPO 法人松江ツーリズム研究会 安部 登氏

松江城の国宝化に尽力された安部氏は松江城のすばらしさとその価値について話して下さった。また、それを後世に残していった先人の努力についてのお話も聞くことができた (図5)。

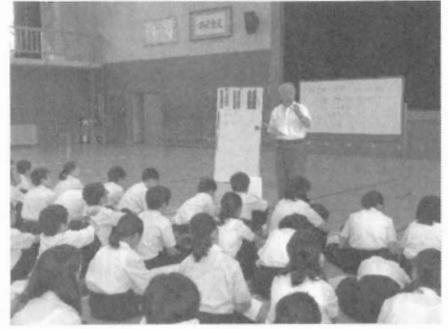


図 5 講演会の様子

講演会のふりかえりより

- これからは、もっと松江城のことについて興味をもちたいし、それをいろいろな人に伝えていけるようになりたいと思います。
- 松江城が国宝になったのは、先人の努力があったからだということがわかりました。松江城の歴史を聞いて、後世にも松江城を残せるようにいろいろな活動に参加したいなと思いました。

講演を通して、生徒は今まで知らなかった島根の課題や良さに気付くことができた。また、「自ら行動し、課題を見つける力をつけることが大切だと感じました」「島根のよいところを残していけるように、自分たちも何かしていきたい」のように主体的に活動に取り組んでいこうとする生徒の姿も見とることができた。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・地元の島根に根ざし、働いていたり、活動をしていたりする方の話を聞くことで、今後の学習への意欲を高められるようにした。
- ・目的意識をもって講演が聞けるように、導入の仕方を工夫した。

学習活動① 【1年生】(ii) 体験学習

(1) 四十間堀醫における交流体験活動

(i) 事前準備・事前訪問・事前訪問後の準備

事前準備では、生徒が事前訪問の当日に「活動の内容」や「交流の内容」を施設の担当の方に提案できるように準備を行った。打ち合わせ前に生徒は、歌を歌う活動や紙風船でバレーを行うなどの活動を計画していた。

事前訪問では、最初に生徒が施設の担当の方と打ち合わせを行った。ここでは、事前準備において計画した活動が施設の高齢者の方にとって実施可能かどうかを確認した。その後、施設の見学を行い、活動を行う場所の確認を行った(図1)。

事前訪問後の準備では、確認したことに基づいて活動の計画を見直した。生徒は、事前の打ち合わせを経て、紙風船でバレーを行うことを変更し、歌や劇を行う計画にした。また、高齢者の方が座ったまま机の上でできるボウリングや輪投げなどのゲームを行うように計画を変更した班もあった(図2)。

(ii) 交流体験

生徒20人が5人ずつA～Dの4つの班に分かれて交流体験活動を行った。10時00分から15時50分までの約6時間の交流体験活動の内、交流体験活動は70分と50分の2部に分けて行った。

A班は、机上ボウリングと輪投げを行った(図3)。B班は、歌や劇を披露した。C班は、楽器の演奏とB班と共同で劇を行った。D班は、A班と共同で歌を歌ったり、ジェスチャーゲームやビンゴゲームを行ったりした(図4)。

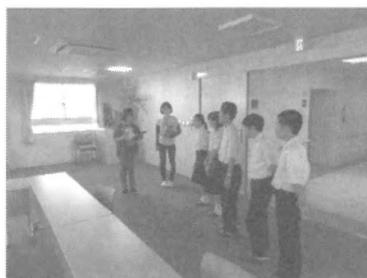


図1 事前訪問の様子



図2 事前準備の様子

時間	活動
10:00	手洗い・うがい 施設について説明
10:20	交流体験活動①
11:30	テーブル・手すり拭き
12:00	昼食
13:00	車椅子体験 車椅子掃除
14:10	交流体験活動②
15:00	入居者の方のおやつ の配膳
15:30	入居者の方との交流
15:50	反省会 活動終了



図3 机上輪投げの様子



図4 ジェスチャーゲームの様子

(iii) 交流体験のまとめ・ふりかえり

交流体験活動後、活動を振り返る時間を確保した。ここでは、「交流活動を通して、交流先の方と一緒に喜んだり、楽しんだりしたこと」と「体験活動で知った島根の良さや課題」についてまとめる活動を行った。以下は、交流体験活動を

終えた後に生徒が記述したふりかえりの内容である。

交流体験活動のふりかえりより

(交流活動を通して、交流先の方と一緒に喜んだり、楽しんだりしたこと)

- 交流先の方々と一緒に、「ふるさと」を歌ったり、ボウリングや輪投げをしたりして、楽しく交流をしました。おやつ時間に、島根についていろいろな話をしました。交流の最後には、交流先の方々が最初よりも笑顔になっているように感じました。
- 私が体験をして思ったことは、「笑顔」と「あいさつ」の大切さです。私たちが笑顔で接すると住んでおられる方も笑顔で返してくださったので嬉しかったです。また、挨拶も大きな声で伝わるように言うことが大切だとわかりました。

このふりかえりから、生徒は交流活動を通して、笑顔で接することの大切さなどを感じ取っていることがわかる。この経験は、日常生活や2年生のBridgeⅡ「社会と関わる」活動につながっていくものである。

交流体験活動のふりかえりより

(体験活動で知った島根の良さや課題)

- 島根県は、人を思いやることができる人がたくさんいるところや、自然が豊かというところがよいところだと感じました。課題として、住みなれた地域で安心して暮らせるような場所が必要だと思いました。
- 僕が交流先の方と話をして考えた島根の良さは、自然が豊かで人もおだやかなところですが、医療や人口減少などの課題もたくさんあります。これらのことを改善していくことで、この島根がより良いものになっていくと思います。

このふりかえりから、生徒は交流先の方と話をする中で島根の良さや課題を考えていることがわかる。生徒が挙げていた島根の良さは、人の優しさに関することや自然の豊かさに関するものが多かった。島根の課題については、高齢者の方が生活していくうえで必要な施設に関することや島根県の人口の減少に関するものが多かった。これらの経験が、「住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～」の今後の活動に生かされることを期待したい。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・生徒が事前準備の活動を行う前に、担当教員が施設の方と事前に打ち合わせを行った。
- ・生徒が交流体験活動を計画する際には、事前訪問において施設の方からうかがった高齢者の方の状況を考慮した活動となるようにした。
- ・生徒が高齢者の方と触れ合う際に、高齢者の方に「島根の良いところ」を尋ねるようにした。このことにより、生徒と高齢者の方との会話が弾んだ。

(2) すまいる苑における交流体験活動

(i) 事前準備・事前訪問・事前訪問後の準備

すまいる苑は、5つのユニットに分かれて運営されているため、生徒は4人ずつ5つの班に分かれて活動を行った。まず、それぞれの班でこの活動の目標を設定した。「相手の立場になって考えて行動する」「失礼のないようにして、相手の思いを知りながら、喜んでもらえるようにする」など、利用者の方や職員の方の思いを感じながら活動することを目標とした。活動の内容を考えていく場面では、ちぎり絵やトランプなどのゲーム、クイズ、歌を歌うなどのアイディアを出した。しかし、実際に利用者の方が行うことができるのか具体的なイメージを思い浮かべることが難しいようであった。

事前訪問では、各班が考えてきた活動案をもとに、担当者の方と打ち合わせを行った。利用者の方の平均年齢が90歳ということもあり、生徒が考えてきた案はそのままだと難しいものが多かった。どのようにすれば利用者の方が行うことができ、喜んでいただけるかという視点で担当者の方にアドバイスをいただいた。また、利用者の方との接し方について、「ゆっくりわかりやすい早さで話す」「あいさつをしっかりする」など、普段なかなか意識できていないことや、「色を使うときは、淡い色より原色が見えやすい」「活動は1つか2つに絞って行う」など、利用者の方の状況に合った活動内容になるよう助言をいただいた。

事前訪問後、各グループで試行錯誤し、より活動しやすいものに変えていった。例えば、ちぎり絵は、下絵を描き、縁（ふち）の部分は生徒があらかじめちぎった折り紙を貼っておき、中の部分を貼れるようにしたり、ジャンケンゲームは大きな画用紙にグー、チョキ、パーの絵を描いて見やすくしたり、トランプの神経衰弱は、1枚1枚のカードを大きくして絵柄で合わせるようにしたりと、担当者の方からのアドバイスを生かしていた（図5）。また、歌を歌うグループは「上を向いて歩こう」など、利用者の方が知っておられる曲をイメージして選曲し、より楽しんでもらえるように工夫していた。



図5 ジャンケンゲームの様子

(ii) 交流体験

体験活動日の午前は、すまいる苑の栄養士の方から、利用者の方の食事についてお話を聞いた。その中で、とろみをつけたお茶や、食べやすいように加工された魚料理を試食させていただき、高齢の方でも食べやすいように工夫されていることを知ることができた。また、その後の車いす体験

時間	活動
10:00	栄養士の方の話を聞く
10:40	車いす体験
11:30	職員の方にインタビュー
12:00	昼食・休憩
13:00	準備・練習
13:30	移動
13:45	交流体験活動
14:45	片付け・移動
15:00	活動終了

では、実際に乗ってみることで、少しの段差でも上りにくいことや、後ろが見えないことで怖さを感じることを体験することができた。午前の最後には、職員

の方にインタビューをし、仕事を始めたきっかけや、どのようなことが大変かなど質問した。中でも、「職員の方が考えるこの職業のプロフェッショナルとは？」という質問には、「さまざまな人生を生きてきた方がいらっしゃるのです、その方の人生を尊重して、その人らしく生きることができるようにしていくこと」と答えられたのが、生徒たちにとって大変印象に残ったようであった。

午後は、準備・練習を行ってから、約1時間の交流体験活動を行った。計画では2つの活動を考えていたが、利用者の方に合わせて1つ目のちぎり絵を一緒にちぎったり貼ったりして、じっくり行った班もあった(図6)。クイズを行った班では、利用者の方の年代を考えて調べて作ったオリジナルのクイズを出し、盛り上げることができた。また、利用者の方に喜んでもらいたいという思いをもって、自分達で考えて用意してきたプレゼントや賞状を渡し、会話が弾んでいた班もあった(図7)。



図6 ちぎり絵の様子



図7 賞状を渡す生徒

(iii) 交流体験のまとめ・ふりかえり

交流体験活動後、活動を振り返った。ここでは、「交流活動を通して、交流先の方と一緒に喜んだり、楽しんだりしたこと」と「体験活動で知った島根の良さや課題」についてまとめる活動を行った。以下は、交流体験活動を終えた後に生徒が記述したふりかえりの内容である。

交流体験活動のふりかえりより

(交流活動を通して、交流先の方と一緒に喜んだり、楽しんだりしたこと)

- トランプの「神経衰弱」では、利用者の方がとても楽しそうにしていました。それを見ると、僕もうれしかったです。「神経衰弱」でたくさんお話をして、交流が深まったのではないかと思います。そこで、利用者の方のあたたかさ、優しさ、喜びを感じることができました。本当に行って良かったなと思いました。施設で働いておられる方に聞いてみると、「利用者の方がとても楽しそうです。」と言っておられました。
- 交流活動をして、最初はお話ができなかった方とも最後の方はお話できたので、とてもうれしかったです。いろいろな方がおられて、声の大きさ・話すスピードのちょうど良さが人それぞれ違うんだと思い、その方に合わせることができました。そうすると、楽しく話ができうれしかったです。

(体験活動で知った島根の良さや課題)

○良さは、自然が多くあり、人が優しいことです。課題は、もっといろいろな人が高齢者や福祉施設のことについて知っていくことが大事だと思います。また少子高齢化が進んでいるので、どうしたら島根に人が残るか、子どもが多い町になっていくか考えていきたいです。

このふりかえりから、利用者の方が喜んでくださることが生徒自身の喜びにつながっていることが分かる。また、最初はどうもいかなかったことも、職員の方からのアドバイスや自分で試してみることによってできるようになったという実感をもっている。島根の良さ、課題については、職員の方とお話をする中で考えることができた。この経験が、2年 Bridge II 「社会に関わる」、そして3年間のテーマである「住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～」につなげていけることを期待する。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・「相手の立場になって考えて行動する」「失礼のないようにして、相手の思いを知りながら、喜んでもらえるようにする」など、利用者の方や職員の方の思いを感じながら活動することを目標とした。
- ・事前訪問では、どのようにすれば利用者の方が行うことができ、喜んでいただけるかという視点で担当者の方にアドバイスをいただくようにした。

(3) 厚生センター八雲における交流体験活動

(i) 事前準備・事前訪問・事前訪問後の準備

事前準備では、生徒が活動当日をイメージし、そのためにどんな準備をいつまでに行うかの見通しをもてるようにした。そして、自分たちが交流体験で行いたい活動を考え、そのために事前訪問では何を職員の方に確認する必要があるのか書き出していった。そうすることで、自分たちの考える活動が実現可能なものなのか、吟味することにつながっていった。そして、生徒達が考えた活動は、歌、紙芝居、すごろく、クイズにしぼられていき、それに関する質問や提案を、事前訪問時に担当の方に提案できるように準備を行った。

事前訪問では、打ち合わせはもちろんのこと、行き方や挨拶といった活動に向けての基本の確認の意味もあった。よって、一人一役で、分担し質問を行ない、施設の担当の方と打ち合わせを行った。ここで、自分たちが考える活動が、高齢者の方にとって実施可能なのか、あるいはどのような改善や工夫が必要なのかを確認した。その後、活動当日のスケジュールや持ち物、注意事項などをうかがい、交流体験に向けてイメージを膨らませた。

事前訪問の結果、活動の見直しの必要はなく、当初の予定通りの計画に基づいて準備を行った。打ち合わせでいただいたアドバイスのもと、高齢者の方が取り組みやすいように、クイズを三択にしたり、すごろくも見やすく大きくしたりするなどの工夫を行なった。歌を歌うグループは高齢者の方にも馴染みのある歌を

選曲し、歌詞を模造紙に書くなど、それぞれの班が打ち合わせを生かしていた。

(ii) 交流体験

生徒は4つの班に分かれ、前半と後半に分けそれぞれが2種類の活動を行った。歌や紙芝居は、聴いてもらうことが中心だったが、高齢者の方の心に伝わるように心を込めて歌ったり読んだりしていた。後半は、すごろく、クイズ、折り紙を高齢者の方と行った。

時間	活動
10:00	厚生センター八雲到着 準備
10:30	交流体験活動①
11:00	交流体験活動②
11:45	昼食・休憩
13:00	職員の方へのインタビュー
13:20	車椅子掃除
14:00	施設見学
14:15	活動終了 厚生センター八雲出発

折り紙を折る場面では、そばに寄り添い高齢者の方の手を取り一緒に折る姿や、クイズ、すごろくでは、高齢者の方の耳元で語る生徒の姿などが見られた。昼食をはさんで、午後には、施設の方にインタビューを行った。施設の職員さんによる「高齢者の方が近くにたくさんおられるのは、とても幸せなこと」「県外に行き始めて島根の良さがわかる」等のお話は、生徒の島根の見方を深めたと感じた。

(iii) 福祉体験のまとめ・ふりかえり

交流体験活動後、活動を振り返る時間を設けた。ここでは、「交流活動を通して、交流先の方と一緒に喜んだり、楽しんだりしたこと」と「体験活動で知った島根の良さや課題」についてまとめる活動を行った。以下は、生徒が「体験活動で知った島根の良さや課題」について記述したふりかえりの内容である。

交流体験活動のふりかえりより

(体験活動で知った島根のよさや課題)

○クイズとインタビューをして、大きい声で相手の方に話をして、会話も続いたので良かったです。島根の良さは、高齢者の方が身近にいて関わりがもてることです。島根の課題は、少子高齢化と人口がだんだん減ってきていることです。

このふりかえりから、生徒は交流先の方と話をする中で島根の良さや課題を見つけることができているのがわかる。高齢者の方と一緒に活動し、ふれあうことで、高齢者の方の存在の大きさに気付いている。さらに、高齢者の方を支えていく若者の人口が減ってきていることに課題を感じている。交流体験活動を通して考えたことが、「住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～」というテーマに向けて、BridgeⅡの活動につながっていくものと考えている。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・事前準備では、生徒が活動当日をイメージし、そのためにどんな準備をいつまでに行うかの見通しをもてるようにした。
- ・自分達が交流体験で行いたい活動を考え、そのために事前訪問では何を職員の方に確認する必要があるのか書き出していった。
- ・事前訪問では、打ち合わせはもちろんのこと、行き方や挨拶といった活動に向けての基本の確認の意味もあった。

(1) 学習発表会

Bridge I では「社会を知る」をテーマに、高齢者福祉施設の訪問を通じた交流体験活動を中心に活動した。その活動を通して学んだことを多くの人に伝えることを目的として、平成 28 年 11 月 15 日に学習発表会を行った。学習発表会は 2 部構成で行い、第 1 部は 1 年生全員が体育館に集まり、1 時間の中で各グループの代表が全体に対して学習したことを発表した。第 2 部は、1 時間の中で生徒一人一人が制作した新聞を用いて、同じ班の人に対して学習した内容を伝える対面発表を行った。対面発表とは、生徒が 4～5 人の班に分かれ、それぞれの班において発表者が体験したことや学んだことなどを発表するものである。

(i) 全体発表

全体発表には訪問した施設の担当者や保護者を招待し、生徒が Bridge I を通じて学習したことを発表し伝えた。全体発表では、まず各学級から 2 名ずつ選出された代表の 8 名が 1 年生の総合的な学習の時間の全体の流れを説明した (図 1)。その後、全 7 グループにおける代表の生徒が「交流体験活動の内容」「体験活動を通して学んだこと」「住みたいまち」など様々な視点から発表を行った。

図 2 に示したグループの発表スライドには、「体験活動を通して学んだこと」として①気を配ることの大切さ、②まちの改善点と良い点を理解することの大切さの 2 つが挙げられている。この他の発表においても①のように、コミュニケーションをとることの大切さや笑顔で人と接することの大切さなど、人と関わっていくために大切にしなければならないことを発表していた。

図 3 に示したグループの発表スライドには、「住みたいまち」について、「高齢者と若い人たちが深く関わり合い協力し合えるまち」とまとめられている。この他のグループの発表においては、「安全で自然を生かしたまち」や「まち全体が明るく、活気のあるまち」、「若い人が住みやすく、働く場があるまち」などが挙げられていた。これらの「住みたいまち」は、生徒が交流体験学習を通して学び、そして見えてきた「島根の良さ」と「島根の課題」からふるさとである島根に対する生徒の思いが感じられた。



図 1 Bridge I について説明している生徒の様子

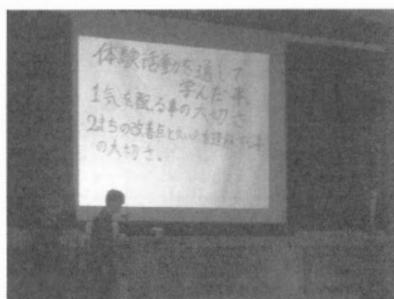


図 2 グループ発表の様子①

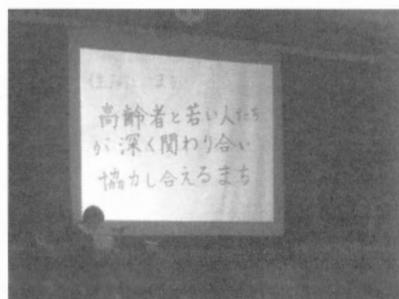


図 3 グループ発表の様子②

(ii) 対面発表

全体発表後、生徒は各教室に戻り対面発表を行った。発表者は、3 分のもち時

間の中で、「相手に伝える」ことを意識し、新聞にまとめた内容を発表した(図4)。中には、発表者が聞き手に質問をしながら説明をしたり、クイズ形式で正解をたずねながら発表を進めたりする生徒の姿も見られた。発表者の発表のあとには、1分間の質問の時間をとり、聞き手が発表者に対して質問をする時間を確保した。班は、異なる高齢者福祉施設に行っているメンバーから構成されているため、自分とは異なる経験をした友だちに対してたくさんの質問が挙げられていた。このような対面発表を班の全員が行い、さらに班を再編成して再度対面発表を行った。



図4 対面発表の様子

(2) 発表会のまとめ・ふりかえり

発表会後の生徒のふりかえりには、次のような記述が見られた。

発表会のふりかえりより

○「コミュニケーションを通して様々な人とつながりあえるまち」が住みたいまちだと発表している人がいて共感できた。そうすると、笑顔があふれる温かいまちになると思った。そんなまちにしていくためにも、私自身がコミュニケーションを大切にしないといけないと感じた。

このふりかえりから、他者が考えた住みたいまちと自分が考えた住みたいまちを比べながら、様々な視点から住みたいまちを考えている姿がうかがえる。さらに、「私自身がコミュニケーションを大切にしないといけない」という記述から、生徒が今のふるさとを住みたいまちにしていくために自分が何をすべきかをしっかりと考えていることもわかる。また、このような記述が表れたのは、今までの活動をまとめたり、他者に伝えたりするという活動があったからであると考えられる。これらの活動を通して、生徒が自分自身の活動をしっかりと振り返ることができたため、今後の生活に対する意欲を強めることにつながったのではないかと考える。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・本年度は、台風接近のため臨時休校となり実施できなかったが、例年は講師の方を招いて新聞レクチャーを行っている。
- ・新聞に載せる写真は一人2枚までに制限した。このことにより、写真によって紙面を埋めるのではなく、文字によって状況や学んだことをしっかりと説明できるようになった。
- ・学習発表会には、訪問した高齢者福祉施設の担当者や保護者を招待した。年度当初から訪問する施設の担当者に対し、発表会の目的や日時、生徒が「住みたいまち」を創っていくための活動であることを説明しておく必要があった。
- ・「相手に伝える」ことを大切にして発表会を行った。ただ単に活動の内容を発表するのではなく、聞き手に対して質問したりクイズを出したりして、生徒が聞き手をひきつける工夫をすることができた。

(1) 講演会

1年生は、島根の現状や課題、良さを知り、住みたいまちについて考えることを目的に、4回の講演会と、交流体験活動を行った。1年生の総合的な学習の時間のまとめとして、中村茶舗の代表取締役である中村寿男氏に講演を依頼した。中村氏は、創業130年の老舗茶屋の経営者として、地元の島根に根ざした活動のみならず、世界にもお茶文化を発信しておられる。伝統息づく島根（松江）の魅力を、生徒に再発見してもらいたい、また、松江の文化を生かして世界で勝負している地元企業の取組や努力を知ること、2年生での職場体験学習につなげて欲しいとの思いから、講演会を企画した。

中村氏は、お茶を取り巻く厳しい国内の経営状況から、海外に進出された。海外に進出し外国の方にお茶を知ってもらおう中で、お茶文化の素晴らしさや、その伝統文化が残っている松江の魅力を熱く語ってくださった。当日は、タイでの活躍の様子等、映像を交えて語ってくださり、生徒にとっても具体的にイメージしやすい講演となった（図1、2）。



図1 講演会の様子

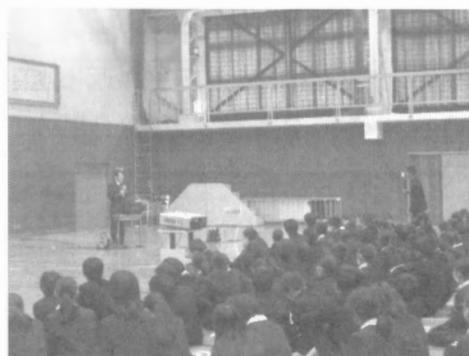


図2 講演会の様子

講演会のふりかえりより

- 私が一番びっくりしたことは、「抹茶」というものを知らない人が多いということです。この松江市に住んでいるから、私には当たり前のように感じていました。日本の伝統文化なので誇りに思い、これも島根の良さなので、大切にしていきたいです。
- 自分たちはあまり考えたりすることのない、お茶文化だけど、島根以外の人から見ると、とても面白い、あるいは素晴らしいものだと思いました。「ふるさと」にある素晴らしいものを発信していくというのも、「ふるさとの明日をつくる」一つの手段であると感じました。BridgeⅡやBridgeⅢに生かしていきたいです。
- 中村茶舗は知っていましたが、海外にまで進出しているとは思っていませんでした。来年の職場体験で活かせるようなことは、「お客さんのことを最優先に考える」ということだと思いました。自分たちの良いようにするのではなく、お客さんを第一に考えることが大切だと思います。

講演を通して、海外や日本というより広い視点で島根（松江）を見つめ直すことで、生徒が今まで気付かなかった島根（松江）の魅力に気付くことができた。地元の魅力を最大限活かして活躍されている中村氏の活動を通して、ふるさとの明日を創る具体的なイメー

ジを生徒がもつための一助になり得たと感じた。また、来年度行う職場体験学習への意気込みにつなげている生徒もおり、この講演のねらいは達成されたと考えられる。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・グローバルに活躍されている方の講演を聞くことによって、海外や日本という広い視点で「住みたいまち」について考えることができた。
- ・グローバルな視点から島根（松江）を見つめ直すことで、生徒が今まで気付かなかった島根（松江）の魅力に気付くことができた。
- ・商品や経営に関するお話から、仕事という視点から考えることができた。講演を聞くことによって、来年度の職場体験学習につながっていく意欲を高める学習となった。

(2) 住みたいまちについて考える

これまでの学習のまとめとして、高齢者福祉施設訪問や、地域に根ざし、様々な分野で活躍している方々の講演会を通じて感じたことや学んだことを振り返った（図3）。

このワークシートは、「まとめと展望」と題し、ふるさとの良さや課題、自分の良さや課題について振り返って記入した。また、2年生での総合的な学習の時間のテーマである「社会と関わる」ための活動への見通しがもてるよう、職場体験のために必要な知識やスキルが必要かについても考えさせた。

そして、3年間を貫くテーマ「住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～」に立ち返り、今の自分にどんなことができるのかを考えることでまとめとした。

1年生総合的な学習の時間 まとめと展望

① 今、あることが出来る 良さ って何だろう？

自然豊かであるところ。

落ち着いた佇まいと良き文化があるところ。

町並みは歴史の風を感じられるところ。

② 今、あることが出来る 課題 ってなんだろう？

過疎化しているところ。

高齢者の方の生活に支えが乏しいところ。

夕陽、夕霧、夕雲、夕霞が綺麗に見えるところ。

③ 福祉施設での交流体験や様々な講演会を通じて感じた
ふるさとの 良さ・課題 は何ですか？

④ 2年生に合った
どんな知識・スキルが必要？

⑤ 2年生のテーマ「社会に関わる」
職場体験でどんな職場に行っておきたい？

「住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～」

図3 生徒のワークシート

① ふるさとの良さと課題について

生徒が考えたふるさとの良さと課題について以下に示す。

【良さ】	【課題】
○自然の多い美しい土地である	○少子高齢化・過疎化
○地域でのつながりを大切にしている	○子ども・働き手の減少
○助け合いの精神が根付いていること	○お年寄りを支える人たちの不足
○豊かな自然・文化が近くにあること	○ふるさとの良さをPRできていない
○落ち着いて子育てができる環境である	○街に活気がない
○何十年後かの日本のモデルである	○交通網が不便である

図3で示した生徒のワークシートにあるように、高齢者福祉施設での体験活動を通じ、多くの生徒が「少子高齢化」という課題に触れていた。さらに、職場で働く方々や高齢者との関わりの中で、単に地域において「できないもの・ないもの」を探すのではなく、課題を前向きにとらえ、解決のための方策を考えようとしていることがうかがえた。加えて、自分の良さや課題に目を向けたとき、どんな場面で良さが生かされるのか、また、実際に社会に出たときに必要な知識やスキルについても考えることができた。

② 1年生での活動を通じて考えた「住みたいまち」とは？

ふるさとや自分の良さと課題に目を向けた生徒達は、次に自分が「住みたいまち」とはどんなまちなのかについて考えた。

子育てのための施設の充実や、高齢者が活躍できる仕組みがあること、若者が楽しめるイベントがたくさんあることなど、多くの「住みたいまち」を描いていた。しかし、ふるさとについて知らないことが多いため、もっと知るための活動が必要と考える生徒も多かった。また、より深く考えた具体的な「住みたいまち」を描くために、2年生の職場体験では「社会と関わる」ことでもっと深くふるさとを見つめることができるのではないかと期待していることもうかがえた。

以下に生徒のふりかえりを示す。

「住みたいまちについて考える」ふりかえりより

- 誰もが支え合って助け合っていくことができるまちが「住みたいまち」だと思います。そのために困っている人に声をかけたり、辛そうな人に寄り添ったりすることができるまちづくりが必要だと思います。
- 住みたいまちについて考えることができていません。なぜなら、もっと島根が今、どうなっているのか知ることが必要だと思ったからです。長所・短所を知った上でどんなまちにしたいのかを考えていきたいと思います。
- 地域の人と多く関わり、島根の良さを伝えていけるような活動を企画できるといいと思いました。
- 住みたいまちにするためには実際に社会での体験が必要だと感じました。2年生では実際に働くことができるので、住みたいまちについて深く考えられるようにしたいと思います。

【指導上の留意点や地域と連携する際の留意点】

- ・住みたいまちについて考える際、高齢者福祉施設での体験活動や地域に根ざし活動する方々の講演会など、今年度の活動を通してどう考えたかという視点を与えることで、学習を振り返って具体的に考えられるようにする。
- ・3年間を貫くテーマ「住みたいまち」にいつでも立ち返り、来年度以降の活動につながっていることを意識できるようにする。